

『わたしは復活であり、命である』井上隆晶牧師

I コリント 15 章 12～17 節、ヨハネ 11 章 17～27、38～44 節

①【キリストが復活であること】

イエス様一行がベタニアに到着したのは、ラザロが死んで墓に葬られ、既に四日もたった後でした。当時、死人の霊魂は死体にもう一度入るために墓の周りをさ迷うが、四日目には霊は去ると考えられていました。ですから四日というのは絶望的な数字だったのです。姉のマルタは出迎え「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(21 節) と言いました。この後、妹のマリアも同じことを言います。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(32 節) これは彼女たちの口を通して語った教会の信仰告白でしょう。これに似た歌詞が讃美歌 2 1 の 316 番の中に出てきます。「復活の主がおられるのなら、世も死もわれを主より離せない」

イエス様はマルタに「あなたの兄弟は復活する」(11:24) と言われると、マルタは「終わりの日の復活の時に復活することは存じております。」(11:24) と答えました。それに対してイエス様は「私は復活であり命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」と言われました。マルタと同じように、復活というものを死後に起こることだと考えているクリスチャンがいます。しかしここでイエス様は、生きていた時に、自分が復活であり命であると言われました。イエス様という存在が復活であり命なのです。それを知らないクリスチャンが多いのです。イエス様は世の始まりから一と復活であり命であり、この世に来られた最初の時から復活しているのです。一度、死にましたが三日目に甦りました。キリストの命を殺すこと、復活を止めることは出来ないのです。あの方は神であり、罪を犯したことがないから殺せないのです。

● 4 世紀のクリュソストモスは 62 歳で生涯を終える時「人は自分の罪で自分を破壊するのだから、誰も破壊することはできない。」と言いましたが、キリストは罪がないので彼を殺すことはできないのです。

復活は人間が自然に持っている力ではありません。死んだら皆、復活するわけではないのです。罪ある人間は復活できません。ただイエス様を信じる、具体的には復活の本体であるイエス様と一体になる人が同じように復活し、永遠の命を得ることができるのです。だから私たちはキリスト神から離れることを恐れます。この世からイエス様と一体になった人は、この世から復活が始まり、来世で完成するのです。一度復活したら、肉体が死んでも、生きています。キーは「キリスト」です。キリストを持つ人は死にません。彼が命の木だからです。その実をとって食べるなら永遠に生きるのです。

②【死の力の前では人間は無力である】

イエス様はマリアや多くの人が泣いているのを見て「心に憤りを覚えて、興奮して」言われました。「どこに葬ったのか」(33～34節)人々が「主よ、来てご覧ください」というと、イエス様は「涙を流されました。」この後、「イエスは再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。」(38節)とあります。二度も憤りを覚えられたと書かれています。イエス様は何に憤られたのでしょうか？私たちは死の力の前には無力です。信仰や祈りさえも死の前には何の力もないように思う事があります。

●明治のクリスチャンで内村鑑三という人がいます。彼が娘を亡くした時、このような文章を残しています。「私は一人娘の病の癒されることを祈った。…私は『恐るな、ただ信じなさい。そうすればあなたの娘は救われる。』というイエスの言葉を、私に語られた言葉として受けた。私は…祈りによって娘は必ず癒されると信じた。私は彼女の息が絶えるまで、このことを疑わなかった。…この時必ず奇跡を目撃するであろうと思った。しかし、ああ、ヤイロの娘は癒されたが、私の娘は癒されなかった。…私の愛する娘は自然の法則通りに死んだ。私は失望した。祈禱の効力を疑った。人は言った。神はあなたの罪を罰したのだと。また他の人は言った。あなたに本当の信仰がないので祈りが聞かれなかったのだと。このような時、信者の立場は実に憐れむべきものである。」

では神はどうでしょうか。神様でさえも死の力の前には無力なのでしょうか。ヤイロの娘が死んだ時、使いが来て「お嬢さんは亡くなりました。もう先生を煩わすには及ばないでしょう。」(マルコ5:35)と言いました。「イエス様でも、もう無理です、お引き取りください」と言ったのです。ラザロの墓で「石を取りのけなさい」と言われた時、マルタも「四日もたっていますから、もうにおいます。」(ヨハネ11:39)と言いました。彼女もさすがにイエス様でも無理だと思ったのです。人間はみなそのように思うのです。神様でも死の力の前には無力なのだと。神は死の力に対して手が出せないのでしょうか。ご自分が思いを込めて創造された宝のような人間が死によって崩壊するのを、神はただ黙って悔しい思いをして見守るしかないのでしょうか。神は死に負けるのでしょうか。命は死に負けるのでしょうか！死がご自分が創造した人間を破壊し、完全に支配し、悲しみを与えているのを見て、主はその敵である死に対して憤り、人間の不信仰に対しても憤っておられるのです。人間は死に慣れましたが、神は慣れません。死は神の敵です。「最後の敵として死が滅ぼされます」(Iコリント15:26)あなたが葬ったのは復活信仰、全能の神への信仰です。あのタラントの僕のように信仰を土に埋めてしまったのです。

③【墓石をどけなさい】

だから「その石を取りのけなさい」と主は命じられます。信仰を土の中に埋め、石で封印までしてしまっています。だからその不信仰という石を取りのけなさいと命じます。主は私たちの助けがなくても何でもお出来になりますが、私たちの信仰と行動を求められます。「水がめに水をいっぱい入れなさい。」(ヨハネ2:7)、

「その石を取りのけなさい」「パンが幾つあるのか。見て来なさい。」(マルコ 6 : 38) 私たちが神の栄光を見るためには、私たちの信仰と行動が必要なのです。石を取りのけるには勇気がいります。疑いながらで良いので、言われた通りに従うのです。

その時、ラザロは、顔を覆いで包まれ、手足が布で巻かれたまま墓から出て来ました。イエス様は人々に「ほどいてやって、行かせなさい」(11 : 44) と言いました。私たちもこのラザロのように、様々なもので縛られ不自由でした。顔は覆われ恵みを見ることも出来ませんでした。イエス様がこの世に来たのは、私たちが縛っている様々なものから解放するためでした。悪霊、律法、病気、罪、死からの解放、それらの恐れからの解放です。私たちは罪を犯しても、それを赦し、私を愛してくれる方に出会ったのです。死んでも蘇らせて下さる方に出会ったのです。そうやって恐れから自由にされたのです。

●昔の祈禱書の讃詞 (トロパリオン) にはこう書かれています。

- ・「主よ、息のない者は、あなたの声を聞いて直ちに生きる者となり、死から復活してあなたを讃美しました。」
- ・「地獄は言います。ラザロよ、何をぐずぐずしているのですか。あなたの友であるイエスは外に立って出て来なさいと呼んでいます。すぐに行きなさい。私も楽になります。私はあなたを飲み込んだ時から、吐き出すように促されています。」

ラザロは死んで四日経ち、彼の霊は陰府に降り、そこで無数の死んだ者たちに会ったことでしょう。彼は死者の仲間になりつつありました。しかし墓の外で命であるキリストが呼んでいるのです。この声を聞く者は生き返るのです。キリストの言葉は、あなたを死から命へ、闇から光へと出すことができます。あなたが今、地獄に、死の世界にいるなら、キリストの声を聞きなさい。ラザロの甦りは、人類の死への勝利の始まりです。死の敗北は始まりました。やがてラザロではなく神キリスト本体が地獄に降ろうとしているからです。

●先日 TV で「プレバト」という番組を見ました。13年続いているバラエティ番組で芸能人が俳句を作ったり、水彩画を描いたりして競う番組です。「プレッシャーバトル」の略です。水彩画を見ると、それは目を見張るようなみごとな絵を描く人がいます。それを見て思いました。人間というのはやはり動物とは違う。真似ることにおいてはものすごい能力を持っているのです。

人間は悪魔に限りなく似る能力も持っていますが、同時に神に限りなく似る者となる能力も持っているんです。だから諦めてはいけません。キリストに目を向け、耳を傾けるのです。画家がモデルを良く見つめて描くなら、すばらしい絵が出来上がりますが、モデルから目を離せば、似ても似つかない絵になるのです。キリストを絶えず見つめる者は必ず、キリストに似てきます。だから絶えず祈りなさい。聞きなさい。実行しなさい。